

序

がんは生涯で2人に1人が発症し、3人に1人が死亡する病気であるという話は一般の人でも耳にしているだろう。1年間で新たに約100万人が、がんと診断されている。医師の側からこの数字を観てみるとどうなるか。レジデントノートの主な読者である初期研修医や専攻医の立場で考えてみよう。直近5年間の医師国家試験合格者数は年間約9,000名である。単純に計算すると初期研修医1年目の医師1人あたり、110名のがん患者が診断されていることになる。研修を受けている病院や診療科とは関係なく、医師として生涯何人ものがん患者に巡り会うことは必至であり、医師として避けて通れない病気である。

がんという病気は、小さくはじまり、徐々に大きくなり、数を増やし、人の健康を害するため、がんの発生、進展のどの時期に患者が置かれているかを認識することががん患者の診療ゴールを設定するとき大事なポイントとなる。また、時期によって起きてくる身体的、精神的、社会的問題が異なるため、問題解決へのアプローチもそれぞれに異なることを意識して患者やその家族に接することがきわめて重要である。本書ではそれぞれの時期で特に初期研修医や専攻医が経験することの多い問題をとりあげ、日頃がん診療の現場で活躍されている先生方を執筆者としてお招きし、その問題の評価や対応についてわかりやすく、すぐに現場で応用できるように解説いただいている。

がんはほぼすべての臓器から発生しうる疾患であり、進行してくるとさまざまな臓器機能に影響を及ぼすことはすでに皆さんもご存知の通りである。また、がん罹患率の高い高齢者では多くの併存症があり、起きてくる臨床的問題は複雑である。臓器に特化した診療体制だけではがん患者の対応ができないのは明らかであり、多診療科・多職種によるチーム医療が必須である。医師になって最初の5年間は特定の臓器に特化することなく、がん患者に接しながらチーム医療を通して、体全体だけでなく、心を含めた一人の人を診ることの大切さを学んでいただきたい。皆さんがそのチームの一員であることを覚えてほしい。私もがん専門医として、一患者を診るのに自分一人でがん治療が完結するわけではなく、外科や放射線科など他の診療科の医師や看護師、薬剤師らの協力が不可欠であることを日々実感している。

さらに私が外来にいるときは病棟患者の問題に対応してくれる研修医や病棟レジデントがいることで1日の診療が成り立っている。初期研修医や専攻医もがんチーム医療の一員である。6年間の医学部教育の後に医師となった皆さんがベッドサイドでがん患者と接するとき、本書を開いてみることで、一般の人として聞いたがんという病気の怖さから逃げることなく、医師として少しでも自信をもって患者やその家族の前に立てるようになっていただきたい。そして何よりも目の前のがん患者さんやその家族たちへ安心を届けていただきたい。その願いを込めて、皆さんの働きに感謝しながら本書を送り出しています。本書が日々のがん診療に携わるチームの一員として皆さんのそばで活躍してくれることを期待しています。

2020年7月

聖路加国際病院 腫瘍内科
山内照夫